

[編集後記]

吉崎亮造

いわゆる「大研究科」といわれる博士課程研究科が7つある。この中でも人間総合科学研究科は、その規模の大きさにおいて突出している。なぜ教育から医学の分野が一つの研究科になっているのか。「人間の諸問題に対する総合的な教育と研究を推進することを目的とする」として設立されている。個に対して平均値がほとんど意味をなさない分野のように思える。個から見た「真理」は、平均値にあるのではなく、あくまでも個が基準である。教育にしても、体育にしても医学にしてもそうである。100人に対して一つの教育や、体育、あるいは医療があるのではなく、100人に対しては100の教育、100の体育、100の医療があり、求められている。

これと対称的な研究科が数理物質科学研究科である。「無から有限のエネルギーは生まれない」といった公理から、ニュートン力学の世界、量子力学の世界といった「客

観的な真実」が成り立つところに価値判断の基準がある。追試が可能なところに創造性と客観性がある。一つの真理は100の事実を説明できる。

一方、メートル原器のように約束事が真実（デジュール・スタンダード）であり、消費者が選択する真実（デファクト・スタンダード）の世界もある。約束事の上で便利さが踊る世界は、技術的に優れたものが正当に評価されるとは限らない。

科学的には質量と長さや時間および電流の四つの単位ですべての単位を表すことが出来る。それでは、世の中は4種類の尺度ですむかと言うと、そうは行かない。オリンピック種目には、芸術点や技術点で優劣が付くものもある。ましてや、科学の最先端では100万分の1秒のさらに100万分の一というとんでもなく短い時間を測るのに時計ではなく、単純な長さを測る物差しを用いると言うからややこしい。基準や尺度を設定することは出来ても正しく測ることは難しい。

(よしざき りょうぞう)